資料２

人生100年時代における学びの方策（案）

～議論のたたき台として～

めざす姿

〇長生きの時代かつ未来が予測しづらい時代において、社会環境の変化に柔軟に適応しながら、社会や人とのつながりの中で、多様な価値観を認め合い、市民一人一人が幸せや豊かさを実感できることは望ましい姿であるといえる。

〇学びのある生活がウェルビーイングの実現を支える礎となり、生涯にわたって健康で豊かな人生を過ごすことにつながるもの。

〇なお、次期総合計画の方針等と同調しつつ、生涯活躍の実現に向けて今後のめざす姿を設定する。

＜市民が学び・活躍できる環境の充実＞

いくつになってもやりたいことに挑戦でき、

学び・活動・体験を通じて豊かさや幸せを実感できている。

＜①学ぶ機会と場の充実＞

市民がいくつになってもライフステージ等に合わせて学び続けられる機会と場の充実について

- 中学校区単位・全２８か所に設置する交流館については、引き続き、地域の「学び・交流・活動の場」としての利用を促進しつつ、平成３０年の条例改正等による運営見直しの成果や今後求められる役割等も踏まえて、効果的な運営など更なる充実を図っていくことが必要。
- デジタル社会においては、パソコンやタブレットなどの機器やWi-Fi環境整備等のデジタル基盤の強化によって、外出に制約のある方等への社会的包摂に資する取組が期待できる。
- また、本市は、県内最大の面積かつ都市部と山村部を有する特徴があり、デジタル化がアフターコロナにおける新たな地域間交流や場所を問わない学習形態としての可能性がある。
- 一方、デジタル機器に不慣れな高齢者等を対象としたデジタルデバイド解消に向けた取組を推進し、格差を是正することが求められる。この取組みは、デジタル機器の操作性（使い方）の学習にとどまらず、他者との交流や社会とのつながりのきっかけとなる効果も期待できる。
- 市が提供する講座などの学習機会に加えて、住民や企業等の民間による取組など市民が学ぶ機会は広がりつつあるが、こうした情報が必要な方へ届かないことがあるため、SNSやブログなど時代に合わせた効果的な情報発信が必要。また、情報を一元化するなど学びに関するプラットホームの構築も有効。
- その他、大学等との包括連携協定を活用するなど高度な専門性を有する高等機関と連携した学びプログラムの開発や共働による市民向け講座などを実施していくことが有効。

＜②学びを生かす機会と地域活性化＞

学びを通して得た成果（知識・経験・つながり）を発揮するための行動機会づくりと社会や地域の課題解決について

- 市内全小・中・特別支援学校に設置する地域学校共働本部については、引き続き、学校と地域が連携した共働の仕組みとして活用しつつ、地域ぐるみの教育を通して、世代間交流や能力を発揮できる場として期待される。また、交流館と連携を図ることで、関わる主体や活動する場が増えるなど、地域とともにある学校づくりに資するだけではなく、子どもを起点に顔の見えるコミュニティが形成されるなど学校を核とした地域づくりに貢献する役割も一定ある。

- その他、市民の活動を支える拠点としての市民活動センター、男女共同参画センター、ものづくりサポートセンターなどについて、時代の潮流や市民のニーズを踏まえて効果的な運営を行っていく必要がある。

- 交流館等の中間支援拠点において、地域や人をつなぐことができる人材（コーディネーター）の存在が重要であり、公的機関での職務経験のある人材や社会教育士等の精通した人材の活用が求められる。

- また、人口減少で担い手不足のなか、社会課題や課題解決のためのプロボノ人材や副業人材を活用することも有効。例えば、市の職員が地域課題解決に取り組む副業を行うための環境の整備も有効。

＜③未来を担うひとづくり＞

これからの未来を担う子どもを起点とした学びや体験機会について

- 本市は、誰もが幸せを感じる「わくわくする世界一楽しいふるさと」を目指して「WE LOVE とよた」の取組を進めており、まちの魅力を次の世代に継承していくことを推進している。持続可能な地域を築いていくうえでは、本市の豊かな自然、歴史・文化などの地域資源に親しみながら郷土愛をつないでいくことが必要。

- 令和6年4月に開館する予定の豊田市博物館は、多様な価値や魅力を守り、伝え、育む豊田市ならではの総合博物館であり、郷土愛を醸成していくための拠点施設として、学びや体験機会の充実が求められる。

- 合わせて、子どもが郷土を愛する心や学びに向かう力を育むための学校教育の取組である「WE LOVE とよた教育プログラム推進事業」についても、豊田市博物館と連携しつつ、引き続き推進していく必要がある。

- 自然、歴史・文化などの地域資源に加えて、多様な大人との出会いが地域の魅力に気付くきっかけとなり、郷土愛につながる事例もあることから、地域の大人と子どもが対等な関係のもと語り合う場をつくることも有効。その際、成功体験や職業の講話でなく、人生の先輩として失敗した話を共有することや否定されない場づくりが重要。

- 令和5年度から段階的に進めている中学校部活動の地域移行においては、子どもがスポーツ・文化芸術活動に継続して親しむことができる機会の確保が求められており、地域の子どもは地域で育てるという理念から学校と地域が連携して推進することが必要。

- また、豊田地域文化広場は、学び・スポーツ・文化における複合的かつ広域的な施設として運営しているが、これまでの経緯やこれからの役割を踏まえ、子ども体験館等の機能を拡充するなど子どもを起点とした多世代が集う施設運営が必要。

- 未来が予測できない時代において、正解のない問いに対峙し失敗を恐れず、わくわくしながら試行錯誤を繰り返し新しい価値を生み出していく力や関係性が求められる。こうした人材を育成するためには、アントレプレナーシップ教育（起業家精神）が有効であり、起業家等と連携しつつ、子どもの年齢や成長段階に応じたプログラムを実施していくことが重要。

＜④大人の学びとライフキャリア＞

複線的な生き方・働き方を踏まえた社会人（大人）の学びについて

- 人生100年時代においては、複線型のマルチなキャリアや会社以外のコミュニティに属することで視野の拡大や豊かな人生につながる。定年延長等で働く期間が長くなるが、定年後からではなく、ライフステージの早い段階からライフキャリアを描くことが効果的であり、ミドルシニアを対象とした学びのプログラムが有効。

- シニアアカデミーをはじめ60歳定年の時代に設計された施策については、参加者の属性等を考慮しつつ、 時代に即したプログラムを実施することが求められる。

- 社会人（大人）の学びについては、国をあげて推進しており、学びのポータルサイト「マナパス」や教育訓練給付金など施策を展開している。学ぶ意思がある方や学びたいことが明確な方については、国の支援策を活用することも有効。

- 一方で、学ぶきっかけがない方や何を学んでよいかわからない方も多くいることから、他者との対話等を通じて自分自身と向き合いキャリアを振り返る場や気づきを得る機会づくりが必要。また、複数の仲間やコミュニティでの学び合いは、継続的な学びや新しい発見につながることがある。

- 学校での学びで終わりではなく社会人（大人）になってから学ぶことの有用性、学びのきっかけや動機につながるイベントや講座、地域の魅力的な人や取組み等の情報の発信強化が必要。

- 交流館は、子育て中の親子、高齢者による昼間の利用が多いため、夜間の交流館を社会人（大人）の学び場として活用できる。さらに、学校の試験時期は交流館に来訪される中高生が増えることから、双方に相乗効果が期待される。

- その他、民間の社会人向けオンライン学習サービスでは、ユニークな動画コンテンツや最新の技術をはじめ、楽しく継続的に学ぶことができるサービスが展開されていることからこうしたサービスとの連携も有効。